

坂 尻 遺 跡

—— 県道掛川袋井線道路改築工事に伴う緊急発掘調査報告書 ——

1984. 3

静岡県袋井土木事務所
袋井市教育委員会

坂 尻 遺 跡

—— 県道掛川袋井線道路改築工事に伴う緊急発掘調査報告書 ——

1984. 3

静岡県袋井土木事務所
袋井市教育委員会

序 文

国道1号袋井バイパスは昭和55年度より工事に入りましたが、磐田・掛川バイパスが開通した現在、袋井バイパスの一日も早い開通が望まれています。そしてバイパス工事に伴い各種の関連工事が計画されています。この報告は県道掛川袋井線道路改築工事のものであります。

調査した所は道路両側で、南北に長く、幅も狭い所でありましたが、道路状敷石遺構、一辺1mの掘り方で根固め石と礎板をもつ大規模な建物が想定される遺構、その他軒かの住居跡、溝状遺構や、円面硯片など多量の須恵器、土師器が検出されています。

坂尻遺跡の範囲は約5万㎡にも及んでいます。この遺跡については、既に報じましたように古墳時代より奈良・平安時代、中・近世に至る複合遺跡であります。掘立柱建物跡群、住居跡群、大溝、和同開珎、銅印、鈔帯金具、分銅、木簡、多量の墨書土器などの出土によって、奈良時代から平安時代にかけての佐益（野）郡衛（家）跡と推定されるに至りました。最近各所で郡衛もしくは郡衛推定地が発掘調査されるようになったとはいえ、県内でも数例にすぎません。また、道路状敷石遺構を、静岡大学の原秀三郎先生は、袋井市内の条里制の復元によって、古代の東海道として提唱されています。そうしたことから、坂尻遺跡の重要性は増すばかりであります。

しかしながら、現在遺跡の中には国道1号線をはじめ、工場用地、民家、商店、県・市道が存在します。その上、バイパスが開通すれば今まで以上に開発が促進されるでありましょう。これから坂尻遺跡を保存活用していこうとすると、開発との整合の問題は、今後大きな課題となりましょう。

4月の未だ肌寒い時期、8月の暑い時期に作業して下さった作業員、調査員、調査を快く承知して下さった沿線の皆さん、調査を計画した県袋井土木事務所にお礼を申し上げます。末尾になりましたが、静岡大学人文学部教授原秀三郎先生、県教委文化課指導主事堀田良雄先生には度々現地へ来て頂き、御指導を賜りました。記して謝意を表します。

昭和59年3月

袋井市教育委員会

教育長 鈴木 勲 一

例 言

1. 本書は、県道掛川袋井線道路改築工事に伴い、昭和58年4月12日から昭和58年11月4日まで実施した灰尻遺跡緊急発掘調査報告である。
2. 本調査は、静岡県袋井土木事務所長を委託者とし、袋井市長を受託者として、静岡県教育委員会文化課の指導のもと袋井市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、吉岡伸夫（袋井市教育委員会社会教育課）を調査担当者として実施されたが、現地調査はそのすべてを前田庄一（同前）が指導した。
4. 資料整理は前田庄一が中心となり、寺田義昭・五島康司（袋井市教育委員会社会教育課指導主事）・吉岡伸夫・永井義博・松井一明・山本宏司・高野由美子・進藤貴和子・鈴木範子（以上袋井市教育委員会社会教育課）・木村弘之（奈良大学学生）が実務作業を分担・補佐した。
5. 本書の執筆分担は次のとおりである。
第1章第1節—寺田義昭 第2節—永井義博 第3節—前田庄一 第2章第1・第2節—
前田庄一（内「iii 平安時代以降の遺構」—松井一明） 第3節—「i 古墳時代の土器」—
前田庄一 「ii 奈良時代の土器」—吉岡伸夫 「iii 平安時代以降の土器」—松井一明
第3章—前田庄一
6. 本書に掲載した現地写真は前田庄一の撮影による。また遺物写真は永井義博が撮影した。
7. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。
SD—溝状遺構 SI—竪穴状遺構 SB—柱穴列
8. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課（寺田義昭）が行った。
9. 発掘調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 序 説	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 歴史的・地理的環境	3
第3節 発掘調査の目的・方法・経過・調査体制	5
第2章 遺 跡	7
第1節 基本層序	7
第2節 遺 構	9
i 古墳時代の遺構	9
ii 奈良時代の遺構	18
iii 平安時代以降の遺構	22
第3節 遺 物	26
i 古墳時代の土器	26
ii 奈良時代の土器	27
iii 平安時代以降の土器	28
第3章 ま と め	30

挿 図 目 次

第1図 袋井市周辺の主要遺跡分布図	2
第2図 坂尻遺跡周辺地形図および発掘調査区位置図	4
第3図 坂尻遺跡全体図	6
第4図 坂尻遺跡土層柱状図	8
第5図 SD1出土土器実測図	9
第6図 SD2出土土器実測図	9
第7図 W-SD3・SD4実測図	9
第8図 E-SD4実測図およびW-SD3・SD4・E-SD4出土土器実測図	10
第9図 SD5出土土器実測図	11
第10図 SD6実測図および出土土器実測図	11
第11図 SD7出土土器実測図	12
第12図 SI1実測図	12
第13図 SI1出土土器実測図	13
第14図 SI2実測図および出土土器実測図	13
第15図 SI3・SI4実測図およびSI3出土土器実測図	14
第16図 SI4出土土器実測図	15

第17図	S I 5 実測図	16
第18図	S I 5 出土土器実測図	17
第19図	S I 6 実測図および出土土器実測図	18
第20図	S I 7 実測図および出土土器実測図	18
第21図	S B 1・S B 2・S B 3・S B 4 実測図	20
第22図	S D 8 出土土器実測図	21
第23図	S D 9 出土土器実測図	21
第24図	S I 8 実測図	21
第25図	S I 8 出土土器実測図	22
第26図	S D 10 出土土器実測図	22
第27図	道路状敷石遺構実測図	23
第28図	S D 11 実測図および出土土器実測図	25
第29図	S I 9 出土土器実測図	25
第30図	包含層およびその他の遺構出土土器実測図	29

図 版 目 次

図版 I	坂尻遺跡遠景(西より) 発掘調査区近景(北より)
図版 II	W-12・13区完掘状況(北より) 福松崖前区古墳・奈良時代遺構検出状況(道路状敷石遺構下、南より) E-3・4区中世遺構検出状況(南より)
図版 III	E-12~17区完掘状況(北より) E-18~21区古墳・奈良時代遺構検出状況(北より) E-22~25区古墳・奈良時代遺構検出状況(北より)
図版 IV	W-S D 3・S D 4内遺物出土状況(南より) S D 6内遺物出土状況(西より) S I 8内遺物出土状況(南より)
図版 V	S I 8内遺物出土状況近景(北より) S I 2内遺物出土状況(北より) S I 3・S I 4内遺物出土状況(南より)
図版 VI	S I 3・S I 4内遺物出土状況(北より) S I 4内長胴甕・甕・高杯出土状況近景(南より) S I 5内遺物出土状況(北より)
図版 VII	S B 3柱列出土状況(南より) S B 3南端柱根近景(東より) S B 3中央柱根近景(南より)
図版 VIII	S B 4完掘状況(北より) S B 4-P-1内礎検出状況(西より) S B 4-P-2内礎検出状況(東より)
図版 IX	S B 4-P-3内礎検出状況(西より) S B 4-P-4内礎板・礎検出状況(西より) 道路状敷石遺構検出状況(南より)
図版 X	道路状敷石遺構検出状況(北より) 道路状敷石遺構検出状況近景(北より) 道路状敷石遺構検出状況近景(北より)
図版 XI	S I 4出土土器
図版 XII	遺構および包含層出土土器

第1章 序 説

第1節 調査にいたる経過

ここで報告する坂尻遺跡は、一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査と一連のものである。バイパス調査の概略を述べると次のようである。

袋井バイパスは建設省事業として計画された。予定路線内の遺跡分布調査は昭和53年度に行い、3遺跡の所在が明らかとなった。建設省は昭和56年度から原野谷川に架かる同心橋の新設工事に着手することになった。そのため建設省、静岡県教育委員会、袋井市は協議をもち、予定路線内の坂尻遺跡を全面発掘調査することとした。

昭和55年12月18日から昭和56年3月31日までの第1次調査結果は、ア、名北地区内は約8,000㎡である。イ、3面以上の生活面が想定される。ウ、数時代の遺構が重複しているが、特に奈良時代については単なる集落跡としたい。

昭和56年4月1日から昭和57年3月31日までを第2次調査として実施した。調査区域は現国道南側4,500㎡である。遺構・遺物から奈良時代の官衙的性格をもち、佐笠（野）郡衙（家）の所在地であろうと推定している。この調査によって遺跡は旧東海道まで及んでいることが確実視できた。

昭和57年4月1日から昭和58年3月31日までを第3次調査として実施した。調査区域は現国道南側約700㎡、北側約2,800㎡である。結果は、ア、古墳時代は祭祀的色彩が強い。イ、駅に関する資料が多く存在する。ウ、佐野郡衙の存在した可能性が益々強くなった。

昭和58年度は現道下を10㎡程度調査し、59年度にも一部調査は残されている。名北地区の調査は終わるものの西方120mの南北約3,000㎡も残されている。現在までに想定できる遺跡の面積は約5万㎡である。

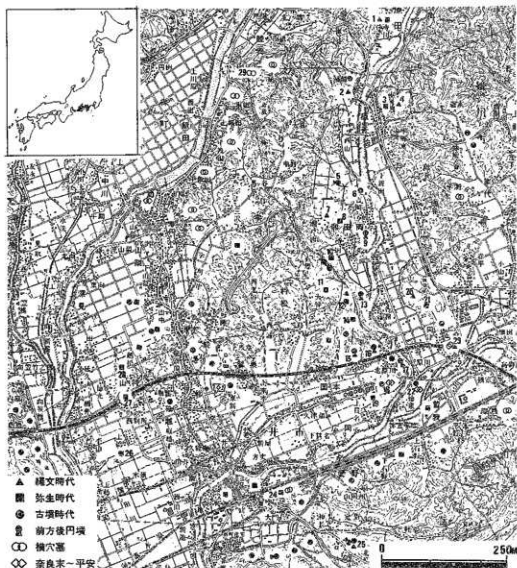
図1バイパス工事に関連した道路工事はいくつか計画されている。この調査の原因となった県道掛川袋井線道路改築工事もその一つである。この工事計画については、以前より承知していたが、袋井市教育委員会への文化財所在の有無の照会も事前協議もなされなかった。そして昭和58年2月、何の連絡もないまま進め方が粗まれ、工事が着行されたのである。直ちに、工事中止を現場工事者、県袋井土木事務所に伝え、県教育委員会文化課に連絡をとった。坂尻遺跡が既に述べたような重要遺跡であることは周知の事実である。土木事務所とは現地を含めて何回かの折衝をもち、県教委文化課とも協議を重ねた。土木事務所は工期との関係で早急な調査を希望したが、バイパス予定路線内と工場用地造成地内の調査が重なり、発掘調査は4月からとなった。

工事は西側北半分から入ることにし、調査と並行して行うことになった。4月4日に重機を入れ調査を6日から行い、道路東側部分については西側北半分の調査終了後南半分から行うことになった。調査計画機関は県袋井土木事務所、指導機関は静岡県教育委員会、実施機関は袋井市教育委員会である。調査は工事と並行であり、幅も狭く、現地住民との折衝、側溝の落下の防止など難渋することは自明であった。東側南半分には民家、工場、商店があり、その出入口及び土砂崩壊の危険箇所は調査区から除くことにした。調査は県の委託事業として行うことにしたが、契約が遅れ昭和58年6月28日で2通の契約書であり、その方法についても不満は残った。その間には他遺跡の調査費を充当せざるをえなかったのである。

また、8月に入って西側部分についても契約したい旨土木事務所より連絡があり、調査を続けて行

うこととした。契約日は昭和58年10月1日であり、2通の契約書となった。したがって、県道掛川袋井線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の委託契約書は4通となったのである。

遺跡の分布及び内容は文化財関係者にとって周知であっても、関係機関との連絡を密にし遺跡所在地を周知徹底することがトラブルを防ぐ課題であろう。また、土地所有者の問題として、遺跡の重要性については十分認識しているが自分の所有地内は困るという意識がある。以上2点の問題を今回の調査で感じたので記しておくことにする。



- | | | | | |
|------------|------------|---------------|--------------|-------------|
| (1) 寺島遺跡 | (7) 瀬戸山遺跡 | (13) 金塚古墳 | (19) 岡本遺跡 | (25) 長吉平遺跡 |
| (2) 幡鐘遺跡 | (8) 和田岡原遺跡 | (14) 浅間山遺跡 | (20) 岡津原Ⅰ遺跡 | (26) 土橋遺跡 |
| (3) 長福寺遺跡 | (9) 瓢箪古墳 | (15) 浅間山古墳 | (21) 岡津原Ⅱ遺跡 | (27) 徳光遺跡 |
| (4) 本郷遺跡 | (10) 石原沢遺跡 | (16) 梅現山古墳 | (22) 原川遺跡 | (28) 鶴松遺跡 |
| (5) 吉岡大塚古墳 | (11) 久野山遺跡 | (17) 宇佐八幡内Ⅰ号墳 | (23) 向山遺跡 | (29) 観音堂横穴 |
| (6) 春林院古墳 | (12) 龍屋北遺跡 | (18) 坂尻遺跡 | (24) 地蔵ヶ谷古墳群 | (30) 稲荷領家遺跡 |

第1図 袋井市周辺の主要遺跡分布図

第2節 歴史的・地理的環境

赤石山脈より南へ派生してきた各和原丘陵が原野谷川に沿って下ってきた南端に開けた小平地に、坂尻遺跡は位置している。ここは、原野谷川右岸の自然堤防から後背湿地へ変わる微高地上に位置し、小笠山塊とに挟まれた狭小な谷底平野の一部である。原野谷川中流域の古地形は、低湿地性植物の生い茂る沼沢地が広がっていたと考えられる。地質図を見ると現河道より北の東海道も砂質の自然堤防の痕跡を残しており、現在のように堤防が整備される以前は数度にわたって河道を変えていたようである。この付近は現在でも南北2kmの中に国道一号线、東名高速道路、東海道本線、東海道新幹線と日本の東西交通の4大動脈が集中している要所である。

原野谷川流域の平地及び周辺の丘陵上には、古くは縄文時代の早期まで通る遺跡が各時代を通じて多数発見されている。これらの概要については『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書—坂尻遺跡第1次調査—』（袋井市教育委他 1981）に詳述されているので参照されたい。

隣接する国1バイパス坂尻遺跡の調査を参考にしながら、周辺の遺跡についても触れていきたい。坂尻遺跡では過去3年間にわたる発掘調査でその全容がほぼ解明されようとしている。

最初の遺構は、4世紀代とみられる古式土師器を出土する土壇と溝状遺構である。これらの土師器は伊勢湾一帯を中心に、遠く信濃・関東まで及んでいるS字状口縁張の資料が中心となっている。これらの土器は古式土師器の標準資料になっており、市内の出土例としては土橋遺跡の Pit 590 の一括土器の中や、同じくSD125の最下層の資料の中に見ることができる。遺構・遺物よりその性格を端的に表す資料は出土していないが自然堤防上に営まれた集落跡の可能性がある。坂尻遺跡・土橋遺跡等の最近の資料により、中連における弥生的色彩を残さない古式土師器の編年が確立できると思う。

次に登場してくるのは、6世紀代の須恵器、土師器を出土する竪穴状遺構・溝状遺構がある。これは、報告書によると、祭祀的要素の強い遺構で後の官衙の成立を考えるうえでなんらかの影響を予測させるものがある。これら古墳時代に関連する遺構については『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報—坂尻遺跡第3次調査—』（袋井市教委他 1983）に述べられているので参照されたい。

奈良・平安時代の遺構・遺物は、坂尻遺跡を官衙跡として証明するに必要な十分な資料がそろっている。33棟をこえる掘立柱建物群や多数の墨書土器に記された文字資料、3点の和同開珎、鈔当金具、銅印、分銅などの金属製品などが検出されている。この時期の周辺の遺跡としては、袋井市山梨の稲荷領家遺跡・同上橋の土橋遺跡がある。稲荷領家遺跡からは、採集資料ながら土器片といっしょに墨書土器、朱書土器、刀子、鉄鏝、瓦等が出土している。土橋遺跡では、採集資料に加えて国1バイパスの発掘調査で掘立柱建築物（SB1他）、溝状遺構（SD130他）が検出され、SD130からは奈良時代末からの墨書土器が出土している。「里人」「里當」「上人」「丸」などの文字資料は現在40点ほど確認されている。

官衙として著名な遺跡は、静岡県内で数ヶ所発掘されているが、特に藤枝市の国指定史跡となっている御子ヶ谷（みこがや）遺跡（志太（しだ）郡衙）や、同じく最近「益厨（ましくりや）」などの墨書土器や掘立柱建物跡などを検出した郡（こおり）遺跡（益頭（ましず）郡衙）などがある。特に郡遺跡は、御子ヶ谷遺跡以上に保存状態が良く規模も大きいことから史跡に指定されることである。また、浜松市の伊場遺跡、浜名郡可美村の城山遺跡を中心とする遺跡群でも「布智厨」の墨書土器があり、坂尻遺跡出土の「×野厨」「玉郷長」「佐野厨家」などの墨書土器はこの遺跡の重要性を証明するも

のである。これに加えて、「日根駅家」「駅長」「火上日請駅家」「三年水鉢 駅」など駅家関係の墨書土器も多数出土しており、浜松市伊場遺跡で問題になった郡衙と駅家の関係と類似した結果を示しており、坂尻遺跡の今後の研究によりこれについての解決の糸口がつかめることと思う。なお、隣の磐田市には、遠江国府の関連遺跡として木簡・墨書土器・硯などを出土する、二之宮遺跡があることを付け加えておきたい。

中世の遺物としては、山茶碗・陶磁器などが出土しているが全体的には少ない。遺構となると小規模な溝跡と、Pit のみである。しかし、最近の調査では袋井市掛の上遺跡や土橋遺跡などのように中世発掘資料を良好な状態で記録している遺跡が多く、坂尻遺跡との比較で報告例の少ないこの時代をかなりカバーできるであろう。土橋遺跡の中世遺構は、一辺30m、幅2m、深さ1.2mの正方形をなす溝状遺構（S D85）がある。これは屋敷跡と推定されているが、Pit377、Pit378 から出土している土器と接合関係にある。またSK44、SK45、SK53という山茶碗を出土する十畿もあり、炭化物の中より木製の箸も一点出ている。また坂尻遺跡の東側、掛川市原川遺跡でも、中・近世の遺構・遺物を多数検出しており交通路としての繁栄がしのばれる。

坂尻遺跡の成果を引用しながら周辺の遺跡について述べてきたが、今回の坂尻遺跡県道部分の調査をみると、道路状敷石遺構など特別な遺構もあるが、内容的には図1バイパスの調査と共通する部分が多く、同一遺跡の範囲内を掘っており、それ以上に坂尻遺跡の南限を知る重要な調査といえる。

かつて原野谷川、垂木川、逆川と三つの河川が水を集める坂尻遺跡周辺は、一度大雨が降ると各地で次々と氾濫をおこしていたのであろう。大自然の中での立地という点ではあまり条件のいい場所ではない。しかし東西交通の要地となれば、丘陵上からこの自然堤防上への拠点を移動させるしかない。この地で水を制御できる技術が導入されはじめた古墳時代初頭から人々の生活が始まったのである。そして、これらの営みは東西の影響をうけながら継続されていったのであろう。



第2図 坂尻遺跡周辺地形図および発掘調査区位置図

第3節 発掘調査の目的・方法・経過・調査体制

i) 目的

今回の発掘調査地は、昭和55年12月から昭和58年3月まで3次にわたり調査が行われた坂尻遺跡の南西に当たる。

坂尻遺跡からは、「×野厨」・「駅子」・「佐野厨家」・「日根駅家」・「三年水鉢 駅」などの墨書土器が出土しており、佐野厨家跡と推定される遺跡である。

したがって、今回の発掘調査の主眼は、坂尻遺跡の南限を確認することにある。

ii) 方法

今回の発掘調査地は、旧国道以北、国道1号線以南の南北約210m、東西巾は60cm から最大巾4mと南北に細長い短冊のような形をしている。そこで、調査に際しては、県道上に磁北より2°23'50"西に偏する南北線を基準線に設定し、基準線上を南北5mの長さで区切ったものを基本グリットとし、遺物の取り上げ、図面作成を行った。グリット名は、4月調査時における県道西側の南端をW-1区とし、北へ順次、W-25区まで設定した。ところが、10月1日以降にW-1区より南を発掘調査することになり、旧国道の北からW-26区～W-42区まで新たに設定した。したがって県道西側のグリット名は、南からW-26区～42区、W-1区～25区という変則的なものとなった。県道東側発掘区については、南半分は調査面積が狭いために、W-26区という呼称は用いず、便宜的に「福松屋前区」、「山下ベース前区」と呼ぶことにした。県道東側北半分については、県道西側同様、3区から25区まで設定したが、西側の発掘区と区別するために、頭に「E」を附し、E-3区・E-25区という呼称にした。

iii) 経過

1983年4月～6月 県道西側のW-1区からW-25区を発掘調査した。中世遺構は、水田耕作等で削られていたが、奈良時代と考えられる柱穴、堅穴状遺構、古墳時代の溝状遺構等を検出した。

1983年6月 県道東側の「福松屋前区」、「山下ベース前区」の発掘調査を行う。梅雨期にあたり、雨で作業を中断・中止することが多かった。その上、追い打ちをかけるように、発掘区の壁面が崩れ、柱根が埋没したまま埋め戻さざるを得なかった。

1983年7月 E-3区、E-4区の発掘調査にはいる。中世の柱穴、奈良時代と考えられる柱穴等を検出した。

1983年8月～9月 E-9区～25区の発掘調査を行う。坂尻遺跡で最大級の奈良時代の柱穴を検出。また、古墳時代の堅穴状遺構、溝状遺構等を検出した。

1983年10月 W-26区～42区を発掘調査する。

iv) 調査体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課 堀田良雄（同文化課指導主事）

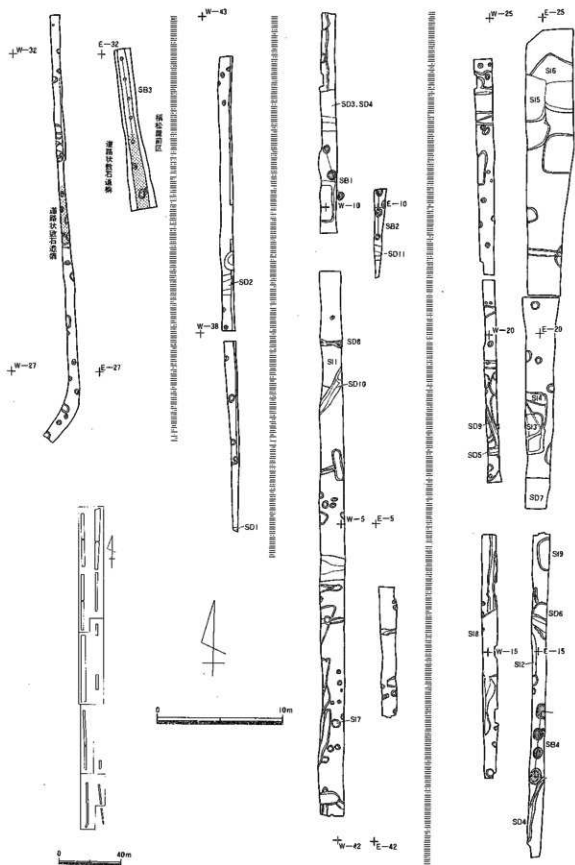
調査担当者 古岡伸夫

調査員 前田庄一

発掘作業員 石川本一、石川一二、三浦政平、三浦久雄、川村義雄、小林金次郎、太田清子、三浦とく江、萩田千代子、鈴木敏子、山本まさ子、寺田しま、山崎雪江、大場佐佳子、米沢昭子

資料整理員 伊藤雅子、守屋雅子

また調査にあたっては、静岡県袋井土木事務所、東栄建設の協力を得た。



第3図 坂尻遺跡全体図

第2章 遺 跡

第1節 基本層序

今回の調査地は、昭和55年度から57年度にかけて発掘調査した坂尻遺跡の南西である。

バイパスで調査した時の基本層序は、表上下1mまでは耕作土〔Ⅰa、Ⅰb層〕、若干の礫を含む灰色粘土層〔Ⅱ層〕、有機質の暗褐色粘土層〔Ⅲa層〕、弱有機質の暗褐色粘土層〔Ⅲb層〕より成っていた。そのうちⅡ層、Ⅲa、Ⅲb層が遺物包含層であった(吉岡 永井他1981)。

今回調査の基本層序も、上記と同様の状況であった。Ⅰ層は盛土、Ⅱ層は耕作土、Ⅲ層は黒色粘土層、Ⅳ層は黄灰色粘土層、Ⅴ層は灰色粘質土層、Ⅵ層は砂礫層、Ⅶ層は砂質粘土層である。

耕作土 工場用地造成により削られ残りは少ない。北端のW-25区で、標高15.90m 付近である。W-37区付近から降下し、W-28区で、15.50m である。

黒色粘土層 バイパス調査時の黒色粘土層と同一である。調査区全域で、黒色粘土を覆土とする溝状遺構、柱穴等の遺構を検出しており、かつては全域に薄く堆積していたのではなからうか。

黄灰色粘土層 バイパス調査時のⅡ層に相当する。ほぼ中央、W-1区からW-14区にかけて顕著であった。この層から、古墳時代、奈良時代、中世陶器が出土している。断面観察では、この層から掘り込んだ遺構はない。W-38区付近で、灰色粘土の上に黄色の層が見られた。この層は黄灰色粘土層に相当しよう。W-33区以南に淡い黄緑色の層があり、黄灰色粘土層に相当しよう。後述する道路状敷石遺構はこの層にあった。

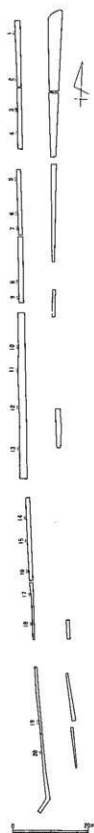
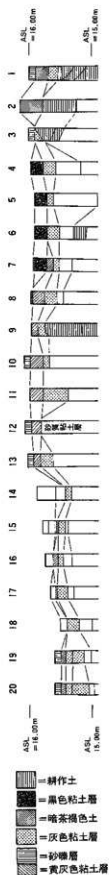
灰色粘土層 バイパス調査時のⅢ層に相当する。全域で確認されたとはいえ、様相はかなり異なっている。W-20区の砂礫層の露頭を境に様子が異なる。W-21区から北では、暗茶褐色である。これには砂利と共に磨滅のない土器片が多い。W-20区から南では、灰色粘質土に有機粒子が混在するが、量的には少ない。W-16区から20区では砂利が多く、W-15区から38区付近は砂質が強い。遺構及び遺物の検出もこの層からが最も多い。古墳時代後期から奈良時代にかけて形成されたものと考えている。W-26区からW-32区には明灰色の層があり、古墳時代後期から奈良時代の遺構を検出した。この明灰色粘土層が、灰色粘土層に対応するものと考ええる。遺物包含層は調査地北端で、標高16m 内外である。W-35区で下がり、南端で標高15.40m 内外である。以上によって、古墳時代後期から奈良時代の遺物包含層と考えられる灰色粘土層は、南北で約60cm の比高差をもっている。

砂礫層 W-10区、W-15区、W-20区から25区で見られた。W-10、20区では浅く、W-15区、24区で深い。W-10区と20区の間で、砂礫層は断面U字形に堆積し、W-20区以北では北に傾斜している。この砂礫層と砂層は互層を成す。出土土器は、いずれも磨滅した細片である。

砂質粘土層 発掘区のはほぼ中央、W-3区から5区に広がる層である。この層中から(標高約15.30m)、磨滅した弥生土器の胴部から頸部までの破片(第30図-97)が出土している。

参 考 文 献

- 吉岡伸夫 永井義博他 1981 『一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書—坂尻遺跡第1次調査—』袋井市教育委員会



第4圖 坂尻遺跡土層柱狀圖

第2節 遺 構

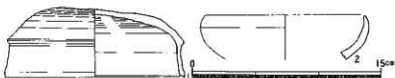
i) 古墳時代の遺構

この時期の遺構には、溝状遺構、堅穴状遺構があり、土器の出土も調査区全域からみられる。溝状遺構は、W-35区から南に集中し、堅穴状遺構は、県道東側のE-15区から北に集中するという特色をもつ。

溝 状 遺 構

SD 1

W-35区、E-35区で検出された溝で、溝の南端を中世溝で切られるが、幅約1.5m分を確認、深さは約90cmを測る。溝内には暗灰色粘土が厚く堆積し、溝底には、約10cmの厚さで青灰色砂が堆積している。1は須恵器杯蓋で、暗灰色粘土層より出土した。口径14.5cm、器高5.5cmを計る。2は、青灰色砂層より出土した土師器杯で口径12.6cmを計る。



第5図 SD 1出土土器実測図

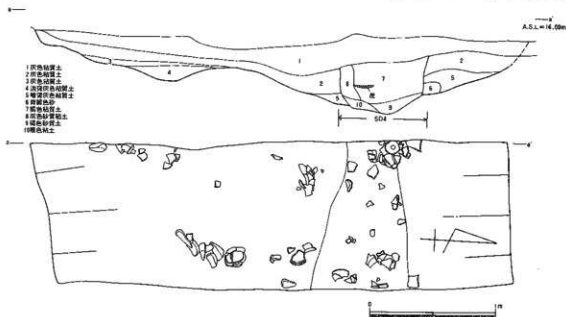
SD 2

W-38区で検出された溝で、幅約2.2m、深さ約40cmを測る。溝内の堆積土は、上層の灰色土、下層の淡黄緑色粘土の2層に分かれ、土器は、炭・灰とともに下層より出土した。3は、所謂S字状口縁を呈する甕の口縁部で口径16.4cmを計る。口縁部を比較的薄く作り、肩部には縦位の刷毛目を施す。

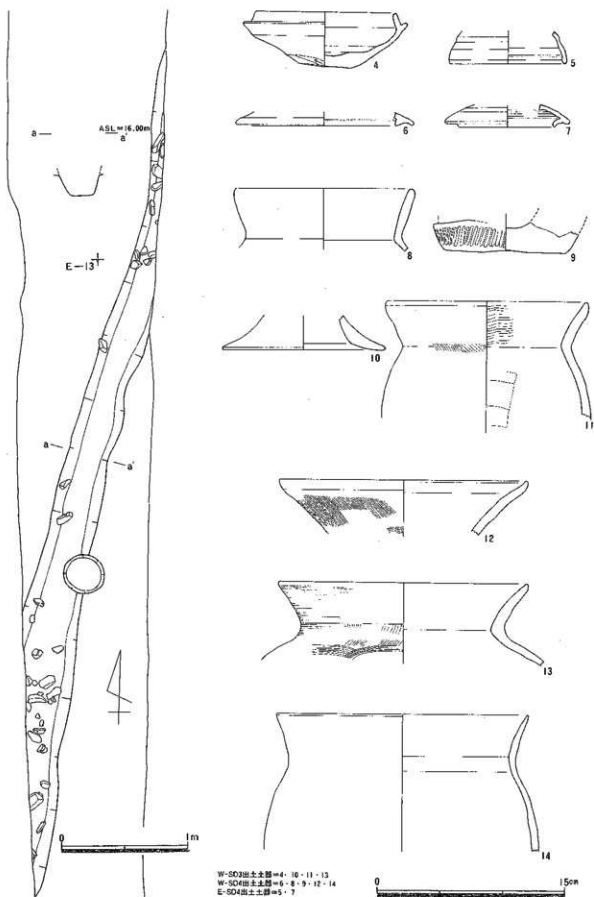


第6図 SD 2出土土器実測図

SD 3・SD 4



第7図 W-SD 3・SD 4実測図



第8図 E-SD4実測図およびW-SD3・SD4・E-SD4出土土器実測図

SD 3

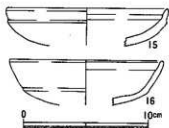
W-12区で検出された溝で、幅約3.8mを測る。溝の立ちあがりは緩やかで、溝底も緩やかに傾斜しており、中央北寄りで最深約30cmを測る。溝内には、灰色粘質土が堆積していた。この堆積土中には、炭・灰・土器を多量に含む層(Ⅱ層)がベルト状に存在した。

4は、須恵器杯身で、口径11.2cm、最大径13cm、器高4.4cmを計る。底部のみを回転ヘラ削りする。底部中央は、ヘラ切り離し後にヘラ削りを行う。11は、長胴甕で、口径16.2cmを計る。口縁内面に横位の刷毛目を、頸部外面に縦位の刷毛目を施す。胴部内面は、薄板を用いた板削りと思われる。

SD 4

W-12区、E-13区～14区で検出された溝である。幅は、W-12区で約70cm、W-13区では約40cmを測り、深さは、県道西側、東側ともに約40cmを測る。溝の壁は、ほぼ垂直に立ちあがる。W-12区においては、SD 3を切り東西方向に走るが、県道東側では、南北方向に走る溝となっている。

5は、口径9.4cmを計る須恵器杯蓋で、天井部と口縁部の境に、カーブによる稜をもつ。6は、かえりをもつ須恵器杯蓋で、かえり径11.4cm、最大径14.2cmを計る。7は、かえり径7.5cm、最大径10cmを計る杯蓋で、かえりは比較的長く口縁端部より下にのびる。



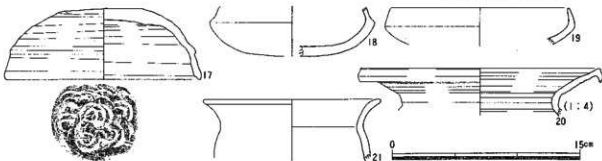
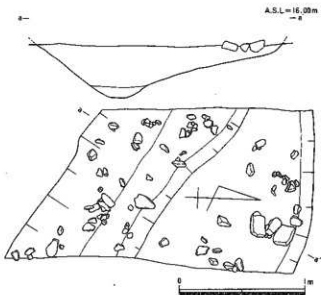
SD 5

W-19区で検出された溝で、幅約60cm、深さ約40cmを測り、暗褐色土が堆積していた。

15は、口径13cm 計り、口縁部近くに明瞭な稜をもつ。16は、口径12.4cmを計り、口縁部と底部の境にカーブによる稜をもつ。

SD 6

E-16区で検出された遺構で、最大幅約2m、深さは最深約40cmを測る。南岸は、直線的にのびるが、北岸は大きく湾曲している。県道西側の発掘区で検出されておらず、堅穴状遺構の可能性もある。遺構内には、上層に粘土の混じる黄褐色土が厚く堆積し、底に約10cmの厚さで



第10図 SD 6 実測図および出土土器実測図

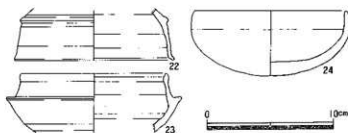
灰色粘土が堆積している。遺物は、黄褐色土層から多く出土している。

17は、須恵器杯蓋で、口径15.6cm、器高5.6cmを計る。器壁は厚く、全体にシャープさを欠く。天井部と口縁部の境に、沈線による鈍い稜が付されている。天井頂部のみをへら削りし、天井内面に同心円状の文が残る。口縁内面に鈍い段がつく。19の土師器杯は、17の須恵器杯蓋と重なった状態で出土した。口径14.2cm、最大径15.2cmを計り口縁部を内湾させる。18は、最大径13.2cmを計る土師器杯で、口縁部を内傾させる。21は、口径14.2cmを計る長胴甕で、頸部に粗い刷毛目を施す。

SD 7

E-18区で検出された溝で、幅2.1m以上、深さ約60cmを測る。溝内堆積土は、上から黄灰色土、茶灰色土、茶褐色土、茶褐色砂となる。

22は、須恵器杯蓋で、口径12.8cm、稜までの高さ2cmを計る。23は、口径11.8cm、最大径14cmを計る。



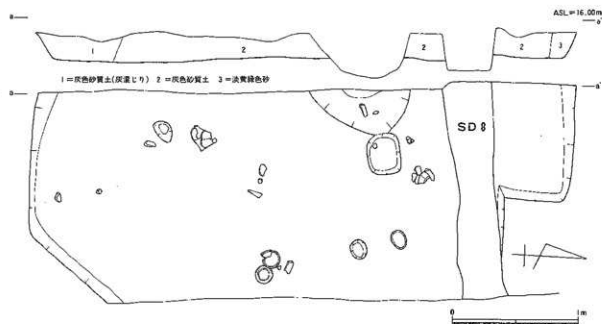
第11図 SD 7出土土器実測図

竪穴状遺構

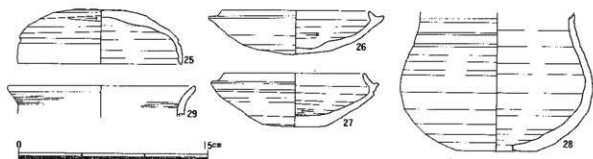
SI 1

W-8区で検出された遺構で、長方形を呈する。南北幅約4.3m、深さ約20cmを測る。遺構内には灰混じりの灰色砂質土が堆積していた。遺構の北端を、奈良時代の溝SD 8が横切る。出土遺物には、土器、鉄滓がある。

25は、発掘区の東側に排水溝を掘っている際に出土したものである。口径13cm、器高4.3cmを計る。天井部と口縁部は、沈線により区画される。天井部の約1/2を回転へら削りする。削りは体部方向から天井頂部方向へ向かう。26は、27と一部重なる状態で置かれていた。口径11.6cm、最大径14cm、器高3.5cmを計る。焼成は不良で牛焼けに近い。27は、口径11.3cm、最大径13.4cm、器高4.3cmを計る。体部の約1/2を回転へら削りする。立ちあがりは、比較的長くやや内傾する。



第12図 SI 1 実測図

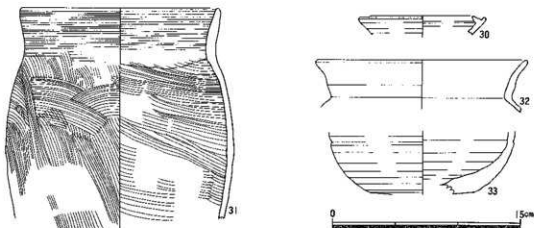
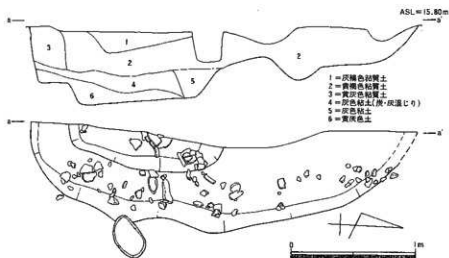


第13図 S I 1出土土器実測図

S I 2

E-15区～16区にかけて検出された遺構で、西半分が県道下にのびるため、全容は明らかではない。発掘区での南北制約3.1m、東西約70cm、深さは約30cm～40cmを測る。遺構内には、黄褐色粘質土が厚く堆積しており、南端に近い1段深く掘り込まれた部分には、炭・灰の混じる灰色粘土が堆積していた。土器は、黄褐色粘質土層から多く出土しており、灰色粘土層からの出土は少ない。

30は、須恵器杯身で、口径8.2cm、最大径10.2cmを計る。立ちあがりは、太く短く内傾し、受部端部よりわずかに上方にのびる。31は、口径16cmを計る長胴甕で、胴部下半を欠く。口縁部は、頸部で屈曲することなく、胴部より直立気味に立ちあがる。胴部外面に縦位の刷毛目を、内面に横位の刷毛目を施す。33は、須恵器甕の底部である。



第14図 S I 2実測図および出土土器実測図

SI3・SI4

E-19区～20区にかけて、南北約5.1m、東西約1.4mの、ほぼ長方形に茶灰色土の堆積する遺構を検出し、SI4とした。遺構を掘っていく段階で、SI4の中央部に、砂質土の堆積する部分を検出したため、この砂質土の堆積する部分を別の遺構と考え、SI3とした。

SI3

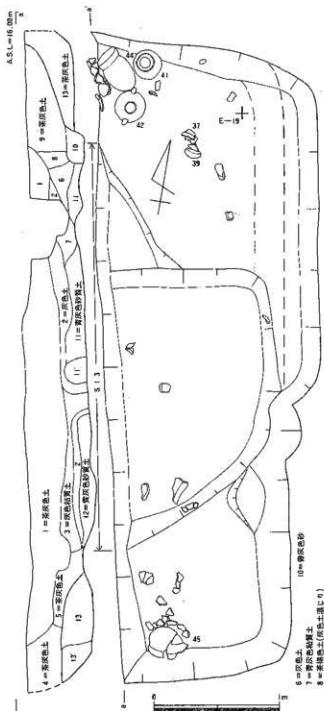
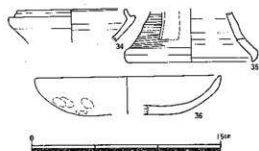
遺構内堆積土は、上層の灰色土、下層の黄灰色砂質土・青灰色砂質土から成る。

34は、須恵器杯身で、口径8.7cm、最大径10.1cmを計る。立ちあがりは短く、やや内傾する。35は、小型高杯の脚部で、カキ目を施す。36は、土師器杯で、口径14.5cmを計る。

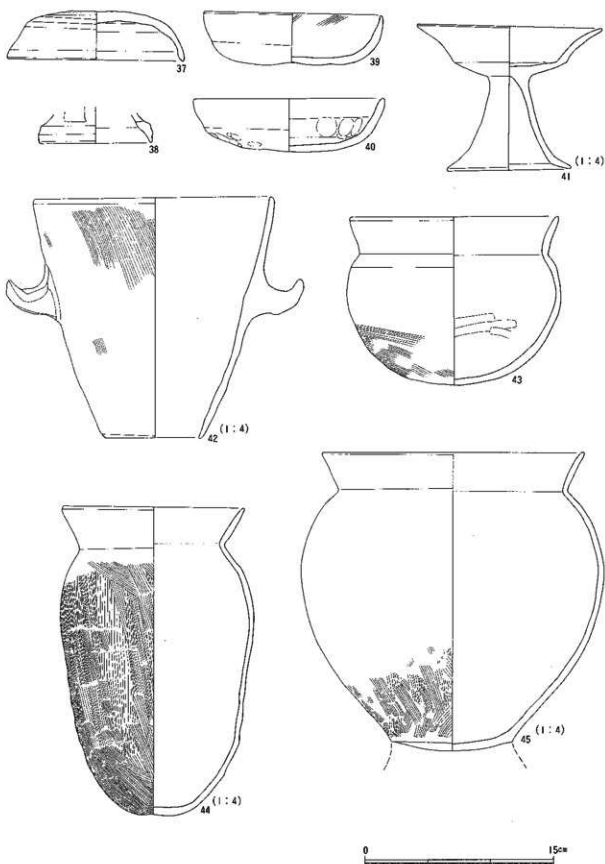
SI4

遺物の出土は、遺構の南端と北端に限られ、北西隅からは、41の土師器高杯、42の甔、44の長胴甔の3点が完形で出土しており、また南端からは、43の土師器壺、45の台付甔が出土している。

37は、口径14cm、器高3.9cmを計る須恵器杯蓋で、天井部を回転へう削りする。39は、37の直下より出土した土師器杯で、口径14.1cmを計る。口縁端部を軽く内湾させる。また、口縁部内面には、斜位の刷毛目を施す。41は、土師器高杯で、口径19.5cm、器高15.5cmを計る。杯部は稜から大きく外反する。42の甔は、外面に粗い縦位の刷毛目を施す。44の長胴甔は、口径19.4cm、最大径20.5cm、器高32.8cmを計り、肩部以下に縦位の刷毛目を施す。45の台付甔は、脚台部分を欠損する。口縁部は、頸部から斜めに外反する。調整は、ほとんどわからないが、底部外面に縦位の刷毛目が残る。



第15図 SI3・SI4実測図およびSI3出土土器実測図



第16図 S I 4 出土土器実測図

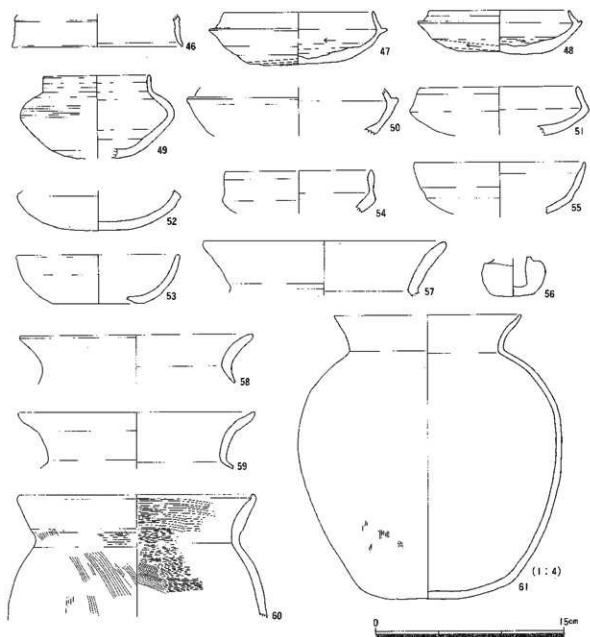
S I 5

E-24区～25区にかけて検出された、長方形を呈する遺構である。南北約3.4m、東西最大約2.7m、深さ約20cmを測る。西半分は泉道下にのびる。遺構内には、茶灰色土が堆積しており、中央の1段深い部分には、炭・灰が混じっていた。遺構内から、土器・礫の出土をみるが、礫は、主に北東隅から出土した。出土した土器の器種は、須恵器杯・短頸壺、土師器杯・長胴甕・甗・壺・ミニチュアの壺など多様であるが、破片化した土器が多く、完形、または完形に近いものは少ない。この土器を除いた段階で、遺構の南端から、径90cm×1m、深さ約35cmを測る柱穴2を検出しており、土器は建物廃絶後に投棄されたものと考えられる。

46の須恵器杯蓋は、口径13.6cm、稜の高さ2.2cmを計り、口縁端部内面に明瞭な段をもつ。47は、口径11.9cm、最大径14.2cm、器高4.3cmを計る須恵器杯身で、底部中央に刷毛目様の捺痕がつく。48は、口径11.2cm、最大径13.1cm、器高3.5cmを計る須恵器杯身で、体部の約1/2を回転ヘラ削りするが、ヘラ削りは、底部から体部方向に向けて行われている。49は、口径8.6cm、器高6.5cmを計る短頸壺で、肩部にカキ目を施す。50は、最大径16.8cmを計る土師器杯で、受部を明瞭に作り出す。51は、口径12.4cm、最大径14.2cmを計る土師器杯で口縁部は内傾する。52は、最大径13.1cmを計る土師器杯で、口縁部はかなり内傾すると考えられる。53は、口径13cmを計る土師器杯で、底部を上げ底気味に薄く作る。54は、口径11.6cm、最大径12.2cmを計る土師器杯で、口縁部はほぼ直立する。55は、口径13.7cmを計る土師器杯で、口縁部は、体部から斜め上方にのびる。口縁部と体部の境に、かすかな稜を作り、口縁端部を薄くシャープに仕上げる。61は、口径20cm、器高30cmを計る完形の土師器壺である。



第17図 S I 5 実測図

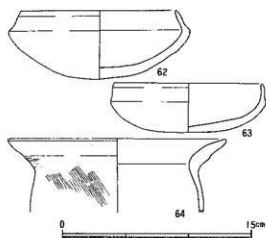


第18図 S I 5 出土土器実測図

S I 6

E-25区で検出された遺構で、南端をS I 5に切られていると判断される。遺構は、砂礫層をいくらか掘り込んでおり、土器等は、砂礫の上に散布しているような状況で出土した。遺構の北西隅に、短径80cm、長径1mの範囲で焼土が散っており、焼土上の中央から61の長胴甕が出土した。この焼土を半截した状況では、遺構の堆積上である灰色土を掘り込んでいるように観察された。

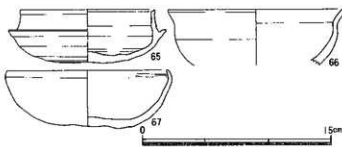
62は、土師器杯で、口径12.4cm、最大径14.4cm、器高5.4cmを計る。口縁部は比較的長く、やや内傾する。体部は、全体に丸味をおびる。63は、口径11.8cm、最大径12.4cm、器高4cmを計る。口縁部は、直立気味に立ちあがる。64は、口径17.4cmを計る長胴甕で、口縁部は大きく外反する。



S 17

W-2区で検出された遺構で、径約70cmを測る円形を呈する。確認できた面が深かったために、深さ約10cmと浅いものになってしまった。遺構内には、茶褐色土が堆積しており、土器は、底より若干浮いた状態で出土している。

65は、須恵器杯身で、口径10.7cm、最大径12.6cm、器高4.2cmを計る。体部の約1/2を回転ヘラ削りする。ヘラ削りは、底部から体部方向に向けて行われている。立ちあがりは長く直立し、口縁端部内面に明瞭な段をもつ。67は、土師器杯で口径12.8cm、器高4.6cmを計り、調整はほとんど不明であるが、口縁内面に、ナデの痕跡が残る。



第20図 S 17 実測図および出土土器実測図

ii) 奈良時代の遺構

この時代の遺構としては、柱穴列、溝状遺構、竪穴状遺構がある。柱穴は、発掘調査地の全域で検出された。調査地の幅が、60cm～4mと狭いために、柱穴列、掘立柱建物として抽出することは不可能に近いが、現地調査の段階で、柱穴列として把握できたものを概説する。溝状遺構は、W-8区とW-19区で2条検出した。また、竪穴状遺構は、W-15区～16区にかけて検出された。

このように、奈良時代の遺構は、柱穴を除けば、非常に数少ないものとなっている。



第19図 S I 6 実測図および出土土器実測図



柱 穴 列

SB1

W-11区で検出された柱穴列で、南北2間分を確認した。柱穴列の主軸は、磁北に対し約 $17^{\circ}30'$ 西偏する。柱穴内には、灰色粘質土が堆積していた。柱間は、南から約1.9m、約2.15mとなる。柱穴の掘り方平面形は、約60cm～70cmの円形を呈し、深さは確認面から約50cmを測る。柱穴3つのうち、南端と中央の2つには柱根が遺存していた。礎板の痕跡は、どの柱穴からも確認されておらず、当初より使用されていなかったものと考えられる。

SB2

E-10区～11区にかけて検出された柱穴列で、南北2間分を確認した。柱穴列の主軸は、磁北に対し約 $2^{\circ}30'$ 西偏する。柱間は、約1.8mを測る。柱穴の掘り方平面形は、約60cm～70cmの円形を呈し、確認面からの深さは、約10cm～30cmを測る。柱根の太さは、柱痕跡から、約10cm～15cmと推定される。

SB3

福松尾前区で出土した5本の柱列である。柱列の主軸は、磁北に対し約 $8^{\circ}50'$ 西偏する。柱間は、南から、約1.8m、約1.6m、約1.6m、約1.7mを測る。柱穴掘り方を確認できたものは、南から2番目の柱穴だけで、径約70cmを測る楕円形を呈する。また、南端の柱根は、後述する道路状敷石遺構の下より出土した。

SB4

E-14区～15区にかけて検出された柱穴列で、柱穴の掘り方平面形が、1辺約1mを測る建物である。今回検出した柱穴列は、渠行方向と考えられ、桁行方向については、発掘区の東側に展開するものと思われる。柱穴の主軸方位は、磁北に対し約 2° 東偏するものである。柱間は、南より約1.5m、1.7m、1.6mを測る。以下、各柱穴を南より、P-1、P-2、P-3、P-4と仮称し概説する。

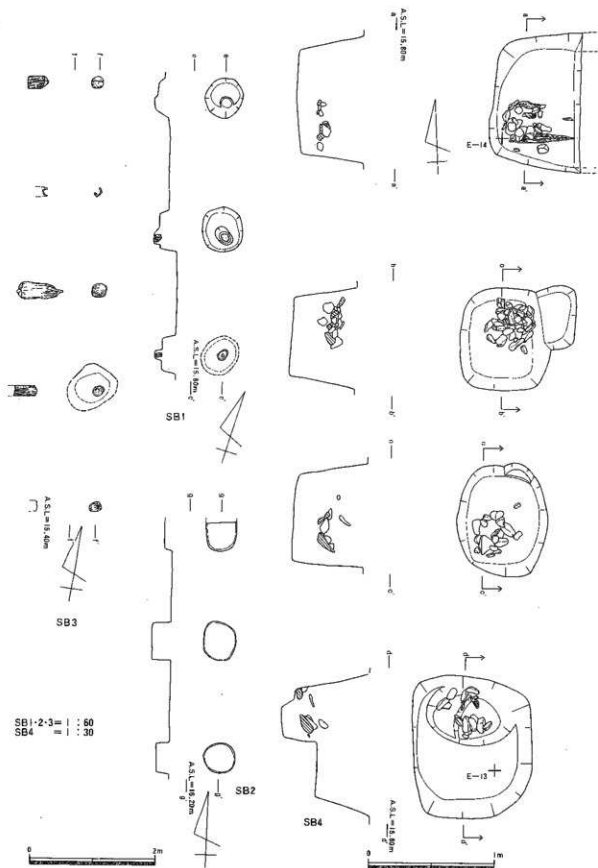
P-1 柱穴掘り方平面形は、約1.1m×約1mの隅丸方形を呈し、柱穴は、2段に掘り込まれている。柱穴内の1段深く落ちるあたりに、根固めの礫が10数個、礎板の断片と思われる木片とともに存在した。根固め礫、礎板の在り方は、散在的であり、土抜き取りの際に動いたものと思われる。

P-2 柱穴掘り方平面形は、約90cm×約70cmの隅丸長方形を呈する。柱穴内の土層は、上から茶灰色土、黄灰色土、灰色粘土となっている。柱穴内には、根固めの礫が、径約40cmの円形に存在したが、礫の中央部には径約15cmのすき間があり、この部分に、柱痕跡と考えられる灰色粘土が存在した。根固め礫の断面形は、中央がくぼむすり鉢状を呈する。

P-3 柱穴掘り方平面形は、約80cm×約70cmの隅丸方形を呈する。柱穴内の土層は、上から黄褐色土、黄色砂質土、灰色粘土となっており、黄色砂質土中に約50個の根固め礫が存在した。径約40cmの円形を呈する根固め礫の中央は、P-2同様くぼむが、中央部にも礫が詰められており、すき間があくことはない。柱根の太さは、礫上の柱痕跡より、約20cmと推定される。

P-4 柱穴の掘り方平面形は、他の柱穴同様、隅丸方形を呈するものと思われる。南北1.1m、東西は、発掘区内の約70cmを発掘した。柱穴内の土層は、上部の、灰色粘質土・茶灰色土・灰色粘土の混じった土、下部の灰色粘土となっていた。根固め礫は、下層の灰色粘土中の上部に位置していた。また、根固め礫の下には、礎板が3本、南北に並列に敷かれていた。3本のうち2本は、すでに粘土化していたが、南端の1本は、長さ約50cm、厚さ約7cmを計る、断面菱形の角材であった。

ここで、SB4の柱穴の特色を整理すると、1、柱穴掘り方の規模が大きい。2、柱穴内に根固め礫が使用されている。3、両端のP-1、P-4は、根固め礫と礎板を併用している。4、P-1、P-2、P-4の灰色粘土中からは、木材の削りくずが出土している。の以上4点があげられる。



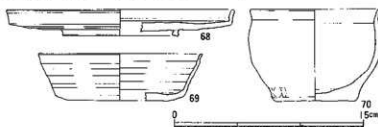
第21图 SB1・SB2・SB3・SB4 实测图

溝 状 遺 構

SD 8

W-8区で検出された溝で、幅約40cm、深さ約30cmを測る。溝は、ほぼ垂直に掘り込まれており、灰色粘土が堆積していた。土器・礫は、溝底より浮いた状態で出土している。

68は、口径18.2cm、器高2.1cm
高台径9.2cmを計る、須恵器有台
盤で、底部の約1/2を回転ヘラ削り
する。69は、口径13cm、器高3.7
cmを計る須恵器無台杯身で、底
部を回転ヘラ削りする。70は、土
師器壺で、口径10.2cm、最大径
10.5cm、器高7.3cmを計る。

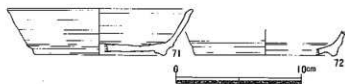


第22図 SD 8出土土器実測図

SD 9

W-19区で検出された、幅約30cm、深
さ約20cmを測る溝で、灰色土が堆積。

71は、口径14.7cm、器高3.7cm、高台
径10.6cmを計る、須恵器有台杯身。

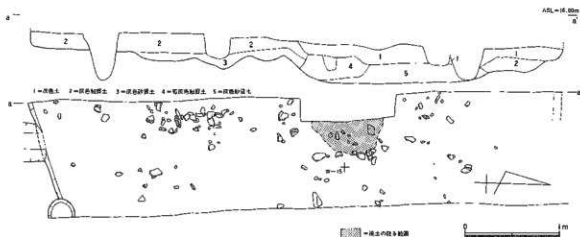


第23図 SD 9出土土器実測図

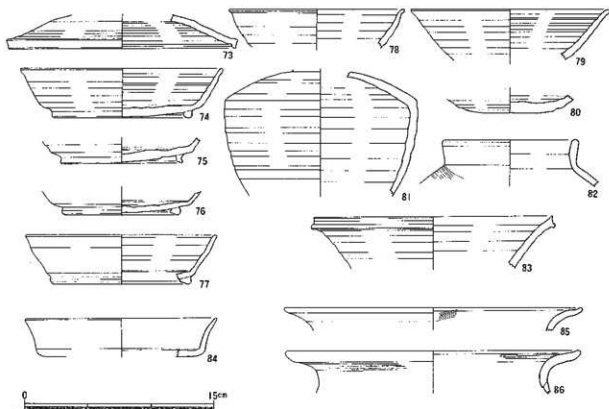
竪 穴 状 遺 構

SI 8

W-15区~16区にかけて検出された遺構である。南側の立ちあがりは明確に検出しえたが、北側の立ちあがりについては、平面で確認することができなかった。そのため、南北幅については、発掘区の西壁断面観察から、約5.6mと推定した。遺構の底までの深さは、W-15区（W-15のグリットポイントより南）で約30cm、W-16区で約40cmを測る。遺構内の堆積は、上から灰色土（1）、灰色粘質土（2）、青灰色粘質土（4）、灰色砂質土（3と5）となっている。W-15区では、（2）から土器が出土しており、出土レベルも一定しているが、W-16区では、（1）からの出土が大半を占めるが、（2）、（5）からも土器が出土しており、出土レベルに最大約30cmの差をもつ。また、W-15のグリットポイント附近には、投棄された焼土が堆積していた。



第24図 SI 8 実測図



第25図 SI 8出土土器実測図

iii) 平安時代以降の遺構

平安時代と考えられる遺構には、福松屋前区とW-29区～30区にかけて検出された道路状敷石遺構がある。

また、中世の遺構には、柱穴、径10cm に満たない杭跡、溝状遺構、竪穴状遺構がある。

以下、中世の溝状遺構、竪穴状遺構、道路状敷石遺構の順に、概説する。

溝 状 遺 構

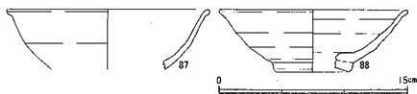
SD10

W-7区～8区にかけて検出された溝で、幅約70cm、深さ約20cm を測る。溝内の堆積は、上層に暗黄灰色粘土、下層に灰混じりの黒色粘土となっていた。

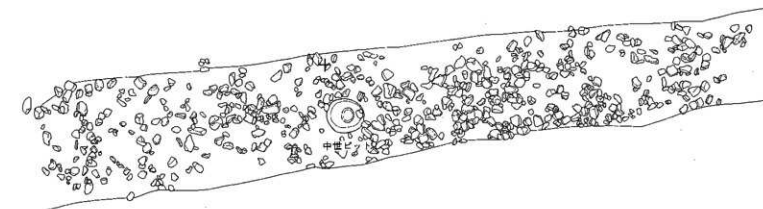
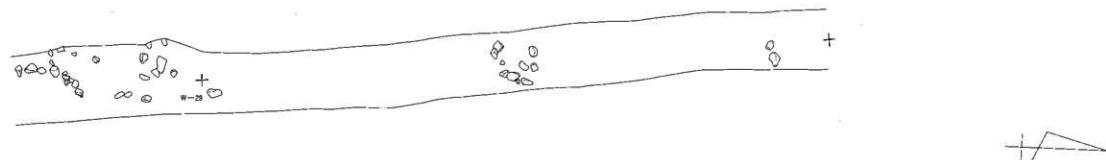
88は、口径15cm、底径6.2cm、器高4.9cm を計る。高台は、肉厚で断面四角形を呈する付け高台で端部に楞痕が認められる。

SD11

W-10区、E-10区で検出された、東西方向に走る溝である。確認面での幅約2m、深さ約50cm を測る。溝内堆積土は、上から、石の多く混じる灰色粘質土、茶灰色粘質土、暗灰色粘質土、暗灰色粘土となっている。土器は、主に暗灰色粘質土層から出土している。

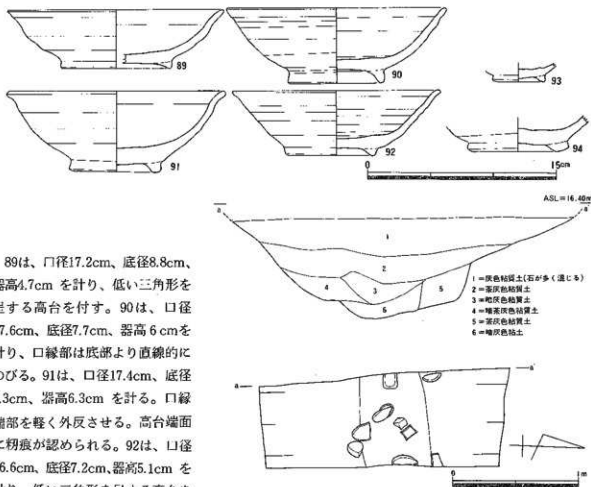


第26図 SD10出土土器実測図



注) W-29とE-29グリッドポイント間の実長は8.181mである

第27図 道路状敷石道橋実測図

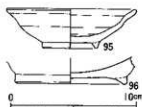


89は、口径17.2cm、底径8.8cm、器高4.7cmを計り、低い三角形を呈する高台を付す。90は、口径17.6cm、底径7.7cm、器高6cmを計り、口縁部は底部より直線的にのびる。91は、口径17.4cm、底径7.3cm、器高6.3cmを計る。口縁端部を軽く外反させる。高台端面に羽痕が認められる。92は、口径16.6cm、底径7.2cm、器高5.1cmを計り、低い三角形を呈する高台を付す。93は、口縁部を欠損する小碗の底部である。94は、底径8cmを計り、台形を呈する高台を付す。

堅穴状遺構 S19

E-17区で検出した堅穴状遺構で、南北約2.6m、東西約1mを発掘した。東半分は、調査地の外へのびる。確認面からの深さ約10cmを測る。

95は、口径10.4cm、底径4.4cm、器高3.2cmを計る小碗で、口縁端部を少し外反させる。96は、底径9cmを計る山茶碗の底部である。第29図 S19出土土器実測図



道路状敷石遺構

県道東側の福松屋前区(E-30区、31区)、水道管布設工事に伴い発掘調査したE-29区、県道西側のW-29区~30区にかけて検出された遺構である。県道東側で検出された敷石の南端と北端の間は、約9mを測る。また、県道西側で検出された敷石の南端は、県道東側で検出された敷石の南端より、約1.5m南に位置する。この敷石遺構は、こぶし大の比較的扁平な石を、淡黄緑色粘土中に平らに敷きつめているだけで、附属する施設は何ら検出されなかった。県道西側では、水田耕作の際に、ほとんど石をはずされており、遺存は悪かった。県道東側においては、黒色粘土を覆土とする中世の柱穴により石をはずされている。また、石の間から奈良時代の須恵器杯蓋が出土しているが、石を除いた時点で、奈良時代と考えられる柱列(SB3)の南端の柱根が出土しており、奈良時代の遺構とは言い難い。また、この点は、敷石の存在する淡黄緑色粘土層が、古墳時代~奈良時代の遺物包含層と考えられる明灰色粘土層の上に堆積した土層であることから言える。時期は、平安時代とみたい。

第3節 遺物

i) 古墳時代の土器

今回出土した須恵器の編年の位置づけ、S I 4 出土土器の年代、土師器杯の年代について若干触れてみたい。

遠江における須恵器の編年（遠江考古学研究会、1966）には、遼考研編年があり、今回出土の須恵器は、遼考研編年の第Ⅱ期～第Ⅳ期後半期に含まれる。

第Ⅱ期—1、22、23、65の土器がある。23は、口径11.8cm、最大径14cm を計る。65は、口径10.7cm、最大径12.6cm、器高4.2cm を計る。23と65は、形態・技法ともに酷似しており、同一時期と考えられる。1は、口径14.5cm、器高5.5cm、稜までの高さ2.9cm を計り、川江試案（川江、1979）の沼津長塚山土例に近く、中村編年（中村、1980）のⅡ型式1段階に比定できるものと考ええる。23、65は、1より若干古い時期のものとした。

第Ⅲ期前葉—17が含まれる。口径15.6cm、器高5.6cm を計り、天井部内面に同心円印文が残り、中村編年のⅡ型式2段階に比定できる。

第Ⅲ期中葉—47が含まれる。この段階の杯は、遠江における初期群集墳より出土している。杯部外面に刺突文よりなる文様帯をもつ長脚二段高杯、頸部外面および体部に刺突文よりなる文様帯をもつ體と伴出するもので、中村編年のⅡ型式4段階に比定できる。

S I 4 出土土器の年代について

S I 4 からは、土師器高杯・長胴壺・甕などが一括出土しており、年代決定の決め手となる須恵器は、37の杯蓋、38の小型高杯の脚部片がある。37の杯蓋は、口径14cm、器高3.9cm を計り、天井部と口縁部を画する稜はない。この杯蓋同様、稜の全くない杯蓋が、中村編年のⅡ型式1段階に比定される瓦屋西B 3号墳周溝内の一括資料に含まれている。37の杯蓋が、Ⅱ型式1段階に比定できれば、小型高杯の年代とも合致するものであり、S I 4 は、中村編年のⅡ型式1段階期の遺構と言えよう。

土師器杯の年代について

今回出土した土師器杯を、形態により、a類、b類、c類に分類する。

a類は、体部が丸味をおび、口縁端部が内湾するもので、2、24、39、67が該当する。b類は、口縁部が稜を境に内傾するもので、さらにb 1類—屈曲が強く、垂直に立ちあがるもの（19）、b 2類—稜よりカーブを描き内傾するもの（18、51、52、54、62、63）、b 3類—須恵器同様、受部を作り出すもの（50）に分かれる。c類は、口縁部が体部よりそのまま反するもので、さらにc 1類—口縁部と体部の境に稜をもつもの（15、16、40、55）と、c 2類—稜をもたないもの（53）に分かれる。

これらの土師器杯は、a類が遼考研編年（以下、遼考研を略す）の第Ⅱ期に、b 1類が第Ⅲ期前葉に、b 2類、b 3類、c 2類が第Ⅲ期中葉に、c 1類は、第Ⅱ期（40）、第Ⅲ期中葉（55）、Ⅳ期前半（15、16）に伴うものと考えられる。

参考文献

- 遠江考古学研究会 1966 『大沢、川江古窯跡調査報告書』
中村 浩 1980 『陶器』Ⅲ 大阪文化財センター
田辺昭三 1966 『陶器古窯址群』Ⅰ 平安学考古学クラブ
川江秀孝 1979 『静岡県出土の須恵器について』『須恵器—古代陶質土器—の編年』 静岡県考古学会
平野吾郎他 1983 『遠江の横穴群』 静岡県教育委員会

ii) 奈良時代の土器

本調査で出土した奈良時代の土器はごくわずかである。竪穴状遺構（SⅠ8）より比較的多まった資料を採集しているが、第22・23・25・30図に図示した以外は細破片であり、器形すら推定しがたいものも多く認められる。

須恵器

杯蓋（第25図-73、第30図-108） 最大径16.5～18.3cm を計る。天井部に丸味を有し、器高は高い。内面に顕著なノタメを残す。天井部の約 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整する。

有台杯身（第23図-71・72、第25図-74～77、第30図-109～112） 最大径14.7～16.0cm を計る。高台接合部がやや内方に移行したもの（第25図-75・76）も含まれているが、総じて底部中央が高台と同じか、ないしは下方に張り出した器形を呈する。高台断面は一般的に丸味をもった三角形様につくられ、体部下半が屈曲するもの（第25図-75・76）と丸味を有するもの（第30図-109・110）がある。底部を回転ヘラ削り調整し、体部内外面を回転ナデ調整する。ひしゃげた高台を有し、口縁部を外反させた第23図-71は、他の有台杯身に比べやや新しくなるものかもしれない。

無台杯身（第25図-78～80） 最大径13.9～15.7cm を計る。体部は内湾しつつ立ちあがり、いわゆる碗形を呈する。第25図-78の口縁端部は若干外反し、丸く仕上げられる。第25図-79は体部内外面に顕著なノタメを有し、第25図-80は底部に回転ヘラ切り離し痕を残す。

盤（第22図-68 第30図-113・114） 最大径18.1～20.6cm を計る。無台盤（第30図-113・114）と有台盤（第22図-68）がある。無台盤は比較的人形、扁平につくられ、外反する口縁部高は低い。断面台形を呈する小形の高台を貼付けた第22図-68は、扁平な底部から背の高い口縁部が外反気味に立ちあがり、端部を丸く仕上げている。無台盤の底部は約 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整する。

図化した須恵器には他にSⅠ8より出土した長頸壺胴部（第25図-81）、口縁部に丸味を有する短頸壺（第25図-82）、複合口縁を呈する中形甕（第25図-83）がある。

土師器

杯（第25図-84） 最大径15.1cm 器高3.0cm を計る。底体部間で屈曲し、口縁部が若干外反する盤状の杯である。体部内外面を横ナデ調整する。

甕（第30図-116） 背の高い高台を有する。高台は外に開き、端部を丸く仕上げる。

甕（第25図-85・86） 口縁径23.4～23.6cm を計る。口頸部は「く」の字状に大きく外に開き、口縁端部をつまみあげた器形を呈する。最大径が口縁部にくるか胴部上半にあるか明確でない。口縁部内外面を横ナデ調整し、頸部以下は細い縦斜位のハケメ調整で仕上げられる。

凹面硯（第30図-115） いわゆる凹足硯の台脚部片である。端部を内屈させ、断面三角形を呈する低い凸帯をめぐる。凸帯より上位に三条の透かしを残す。硯面の形状は明確でない。

以上奈良時代の土器について概述したが、須恵器有台杯身については伊場A類（川江1980）に比定されるものが主体をしめている。また図化した資料中に盤状を呈する須恵器無台杯身は認められない。出土土器量が少ないため断定できないが、本調査で検出された奈良時代の遺構の多くは奈良時代前半に属するとみて大過ないように思われる。調査地点は坂尻遺跡の西縁を南北に縦断している。出土土器の主体は奈良時代前半に位置づけられ、また総出土量が著しく少ない事実は、坂尻遺跡の範囲、性格を考えるうえで注目されよう。

参考文献

川江秀孝 1980 「第2章 壺書土器の形態分類」『伊場遺跡遺物編2』 浜松市教育委員会

iii) 平安時代以降の土器

今回の調査にて出土した中世の遺物は中世陶器で、前述した溝状遺構、柱穴状遺構から主に出土しているが、総数としては古墳時代の遺物に比して少量で、主なものはほとんど図示されている。中世陶器は、山茶碗、小碗の器種があり、ほかに図示していないが甕形土器の小破片がある。

今回の調査でもっともまとまって出土したものに、S D 11出土遺物がある。第28図89～92、94は山茶碗で、89、92のように口径17cm 内外、器高5cm 内外の浅く平たい形状のものと、90、92のように口径17cm内外、器高6cm 内外のものがある。体部形態は丸味をおびるものが多いが、口縁部は直線化し、口唇部もやや外反する89、91、92、ほとんど直線化している90などがある。高台も高く、断面三角形を呈する90、低く肉厚で断面四角形を呈する94、低く断面三角形を呈する89、92などがある。高台端面は90、91のように朽痕を残すものと、89、92のようにナデ調整のものがある。小碗は断面四角形を呈する付け高台の形状を示すが、口縁部形態は不明である。

以上のようにS D 11出土遺物の特徴は山茶碗について、体部は丸味をおびているが口縁が直線化しており、口唇部も直線化したものを含む点、高台は断面三角形で低いものが多く朽痕も認められる点、高台付の小碗の形状等があげられる。

他の資料として、S D 10出土の山茶碗も第26図87のように口唇部が大きく外反するものなどがあるが、88のように肉厚な高台や、やや直線化した口縁部をもつものがあり、S D 11出土資料とはほぼ同時期と思われる。S I 9出土の遺物は全体の形状を知りうるものが第29図95の小碗のみであるが、浅く平らな形状で、高台も低く断面三角形を呈することから、やはりS D 11出土資料とはほぼ同時期であろう。その他の遺構、包含層中の遺物については、小破片が多く全体の形状を知りうるものは少ないが、第30図117のように高台が底面の外端につくもの、119のようなつづれた様な高台をもつものなど、S D 11出土資料より新しい要素が見られるものがある。

さて遠州地方の中世陶器の編年であるが、向坂、山村氏の編年観¹⁾、足立氏の編年観²⁾がある。

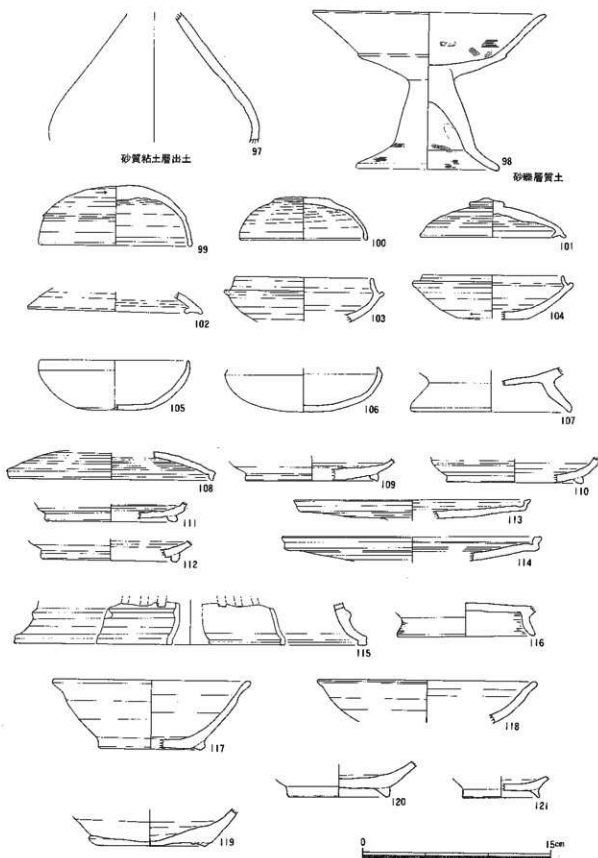
向坂、山村氏の編年観は、宿北古窯の出土資料より中世陶器をA、Bの2群に分類し、A群は胴部がやや丸味をおび、粗雑な高台をもつ山茶碗の形態、無高台の小皿をもつ点から13世紀、B群は直線化した胴部、小形化した小皿より13世紀末～14世紀前半期にあてている。足立氏は東笠子(HK)27地点遺跡出土の資料を形状、底部切離調整技法の分類により13世紀中～後半期に位置づけている。

以上の編年観があるが、対象となった資料は13世紀のものとされており、中世陶器の全体編年を大系づけるものではない。今回報告するS D 11出土資料は前述の特徴から宿北古窯、東笠子27地点遺跡よりも古い要素が認められる。

また比較的編年の進んだ愛知県では久永氏³⁾、杉崎氏⁴⁾、藤澤氏⁵⁾らの編年観がある。これらの編年観を比較してみると、今回報告する資料のほとんどは包含層中出土の若干新出の要素をもつものをのぞき、久永氏の第1型式、杉崎氏の第1型式、藤澤氏第Ⅱ段階に相当するものと思われる。実年代については12世紀代とされているが、今回報告した資料の詳細なセット関係や実年代の基準となる資料が知られないため細分型式の設定とともに今後の資料の増加をまって検討したい。

参 考 文 献

- (1) 向坂周二、山村宏 1965 「14 宿北及び陶川の古窯跡」『静岡県文化財調査報告書第6集』 静岡県教育委員会
- (2) 足立順司他 1982 『東笠子(HK)第27地点遺跡発掘調査報告書』 函西市教育委員会
- (3) 久永春男他 1958 『刈谷市の古窯』 刈谷市誌編纂委員会
- (4) 杉崎 章 1981 『高坂古窯址群』 常滑市教育委員会
- (5) 藤澤良祐 1982 「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅰ』 瀬戸市歴史民俗資料館



第30図 包含層およびその他の遺構出土土器実測図

第3章 ま と め

本発掘調査の対象域は道路拡幅部分のみに限られていたため、調査区の南北全長が210m におよんだものの、東西幅は著しく狭いものであった。それゆえ全体的な把握を断念せざるをえなかった遺構も数多くある。道路の両側には住宅・工場が建ち並び、決して好ましい条件のもとでの発掘調査ではなかったが、板瓦遺跡の範囲・性格等を考えるうえで、本調査の提供した新資料は少なくない。以下調査成果を整理し、まとめとした。

- ① 板瓦遺跡の範囲については、国1バイパス建設に伴う発掘調査（吉岡、永井1981）および分布踏査等により、原野谷川以西の自然堤防上、東西400m 南北500m にわたり分布するものと推定されてきた。本調査地点はこの遺跡範囲のなかで西南縁に位置していたわけであるが、調査区全域で古墳時代から奈良時代、中・近世におよぶ多くの遺構が検出され、遺跡の南限が旧東海道を越えてさらに南に拡がることは確実である。また調査区周辺の遺構の残存状態も良好なものと考えられた。
- ② 古墳時代の遺跡のうち、特に竪穴状遺構（SⅠ）の分布は調査区中央（W-15区）以北に集中している。昭和57・58年度の発掘調査（吉岡、松井他1982・五島他1983）においても類似する竪穴状遺構が遺跡西半から数多く検出されており、今後こうした群集する竪穴状遺構の性格について検討される必要があろう。
- ③ 古墳・奈良・平安時代に属する溝状遺構（SⅠ）は少ない。昭和57・58年度の発掘調査（吉岡、松井他1982）で確認されたような、障による護岸施設を有し、古墳時代から奈良時代にかけて使用が継続したと思われる大規模な溝状遺構は、まったく検出されなかった。
- ④ 奈良時代と考えられる柱穴は、調査区のはほぼ全域に分布している。調査範囲の制約により全貌を明らかにした掘立柱建物はないが、E-14区・15区で検出された柱穴列の掘り方の規模は大きく、柱間も広い、礎石と根固め礫を併用した柱穴列（SB4）も確認され、国道1号線周辺に比べ、大規模な掘立柱建物群が構築されていたものと推定される。
- ⑤ 調査区南端で検出された道路状敷石遺構は幅約9m と広く、現存する「旧東海道」の北側に隣接している。検出位置が、復元された袋井市域の条里界線（原1983）に一致するとの指摘があり、その性格については、周辺域の発掘調査資料の増加をまってさらに検討されるべきであろう。

参 考 文 献

- 吉岡伸夫・永井義博他 1981 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書一版瓦遺跡第1次調査一』 袋井教育委員会
- 吉岡伸夫・松井・明他 1982 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報一板瓦遺跡第2次調査一』 袋井市教育委員会
- 五島康司他 1983 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報一板瓦遺跡第3次調査一』
- 原 秀三郎 1983 『第3編第2章 律令制下の袋井市域』『袋井市史 通史編』 袋井市役所

* 原秀三郎氏にご教示いただいた。

第1章第2節 参 考 文 献

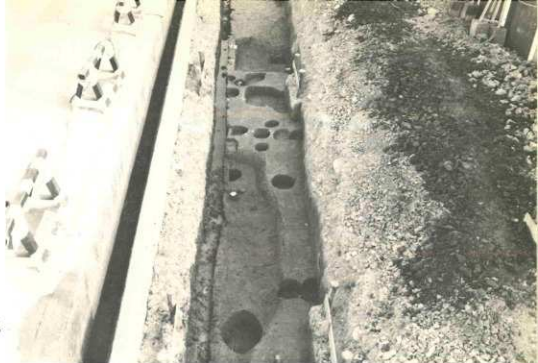
- | | | |
|-----------|------|--|
| 静岡県教育委員会 | 1979 | 『静岡県道跡地図・地名表』 |
| 静岡教育出版社 | 1978 | 『フィールドワーク 静岡の地学』 |
| 静岡市教育委員会 | 1981 | 『御殿・二ノ宮道跡発掘調査報告』Ⅰ |
| 袋井市教育委員会他 | 1981 | 『一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書—板尻道跡第1次調査—』 |
| 袋井市教育委員会他 | 1982 | 『一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報—板尻道跡第2次調査—』 |
| 袋井市教育委員会他 | 1983 | 『一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報—板尻道跡第3次調査—』 |
| 袋井市役所 | 1983 | 『袋井市史 通史編』 |
| 袋井市教育委員会 | 1983 | 『掛の上道跡』Ⅱ |
| 藤枝市教育委員会他 | 1981 | 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—奈良・平安時代編— 志太郎道跡(御子ヶ谷道跡・秋合道跡)』 |



坂尻遺跡遠景（西より）



発掘調査区近景（北より）



W-12・13区 完掘状況
(北より)

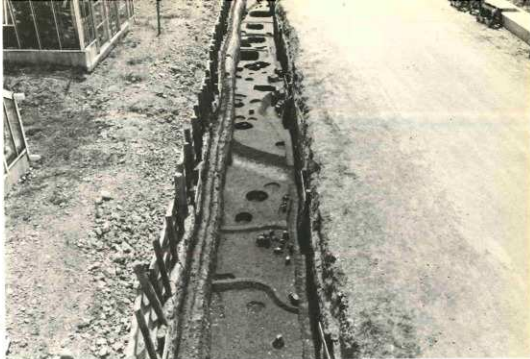


福松屋前区 古墳・奈良時代
遺構検出状況 (道路状敷石
遺構下、南より)

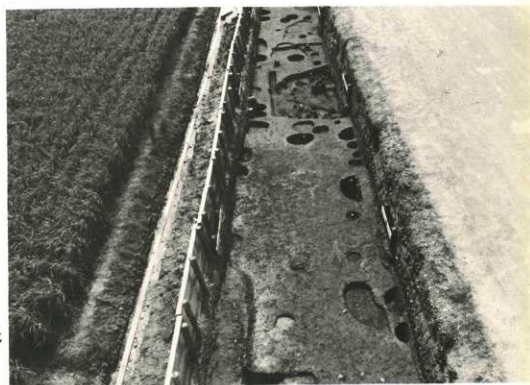


E-3・4区 中世遺構検
出状況 (南より)

E-12-17区 完掘状況
(北より)



E-18-21区 古墳・奈良時代
遺構検出状況 (北より)



E-22-25区 古墳・奈良時代
遺構検出状況 (北より)



W-SD3・SD4内 遺物
出土状況（南より）



SD6内 遺物出土状況
（西より）



S18内 遺物出土状況
（南より）



S 1 8 内 遺物出土状況
近景（北より）



S 1 2 内 遺物出土状況
（北より）



S 1 3・S 1 4 内 遺物出土
状況（南より）



S13・S14内 遺物出土
状況（北より）



S14内 長胴甕・甗・高杯
出土状況近景（南より）



S15内 遺物出土状況
（北より）



S B 3 柱列出土状況
(南より)



S B 3 南端柱根近景
(東より)



S B 3 中央柱根近景
(南より)



SB4 完掘状況（北より）



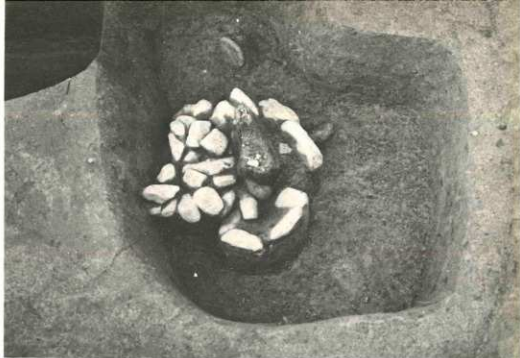
SB4-P-1 内 礫検出状況（西より）



SB4-P-2 内 礫検出状況（東より）



S B 4—P—3 内 礫検出状
況（西より）



S B 4—P—4 内 礫板・礫
検出状況（西より）



道路状敷石遺構検出
状況（南より）



道路状敷石遺構検出状況
(北より)



道路状敷石遺構検出状況
近景 (北より)



道路状敷石遺構検出状況
近景 (北より)





39



37



40



41



42



43



44



45

S I 4 出土土器
(番号は挿図番号に
あわせてある)



47



56



24



61



52



98



17



61

遺構および包含層
出土土器（番号は
挿図番号にあわせ
てある）



115

坂 尻 遺 跡

—県道掛川袋井線道路改築

工事に伴う緊急発掘調査報告書—

1984年3月31日

編 集 袋 井 市 教 育 委 員 会

浜松市中沢町1番1号

印刷所 株式会社 開 明 堂